

夢の中のババライナ

early-morning

大学2回生の夏、ボランティア活動でブルガリアに出向いた。首都からバスで2時間、そこからでこぼこの山道を車で30分走ったところにあるブラヒという村で2週間、壊れかけた家の修復作業を手伝った。ババライナはその家の隣に住んでいた。彼女は当時70歳の一人暮らしで、野菜を作って生活していた。彼女はブルガリア語しか話せなかったが、私が毎日彼女の水汲みを手伝ったことで仲良くなった。彼女は私をとてかわいがって、会うたびに素敵な笑顔で元気をくれたので、別れの日には本当に悲しかった。過疎な地域なうえに衛生環境も万全ではないこの村で、ババライナが今後何年も生きられるとは思えなかったからかもしれない。期間限定の交流ではあったが、帰国後も彼女の笑顔の写真は、私に元気を与え続け、何度か夢にも登場することになる。

夢という言葉から連想する作家は吉本ばななさんで、「ひな菊の人生」の物語の中でも、夢は重要な役割を担っている。父親もおらず、母親も衝撃的な事故で亡くしたひな菊は、幼い頃に別れた親友のダリアとすごした日々の楽しい思い出と夢を胸に生きている。

ババライナが今生きているのかを確認する連絡手段がないことは、私を不安にし、当時、私は悲しみに苛まれることがよくあった。

そんなとき、私はこの「ひな菊の人生」のページを開く。

「生きていればいいってもんでもないし、死んだら悲惨だということでもないじゃないか。」
生死に価値を見出すのではなく、作った思い出がそのとき生きていたからこそ今ここにあり、それが今の自分を支え、自分の一部であることは何よりも尊い。これは現実から逃げているのではなく、現実と向き合うための一つの手段としての考え方を提示しているのだ。

現代の私たちを支えているものは何だろうか。私はそれが、メールや最新IT技術ではなく、自分の思い出と想像が詰まった「私という箱」の中にあると思いたい。